

## 本書の特長と利用法

### ■本書の特長

本書は、大学入試問題の実戦演習を目的として、国公立大学の最近の個別試験問題から古文十五題・漢文七題の記述式の良問を精選した問題集です。

各問題の冒頭には、出題大学の試験時間・配点をもとに割り出した〈標準解答時間・配点〉と、難易度の目安〈★☆☆標準・★★☆やや難・★★★かなり難〉を表示してあります。別冊の〈解答・解説編〉には、詳細な〈解説〉と〈採点基準〉を掲載し、実戦的な演習ができるように編集してあります。

ここに収められた古文十五題・漢文七題と真摯に取り組むことで、大学入試を突破するために必要な、読解力と記述表現力を養い、志望校合格を果たされることを願ってやみません。

### ■本書の構成

〈古文・問題編〉〈漢文・問題編〉〈記述解答用紙〉〈解答・解説編〉の4冊子に分かれています。

### ■効果的な利用法

① まず、〈問題編〉の各回の最初に示した〈標準解答時間〉内で、ひととおり問題を解いてください。

——これは〈速く解く〉ための練習です。

② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、もう一度じっくり読んでください。本文の理解が深まったところで、記述解答についても、よりよい解答にできないかどうか、考え直してみましょう。

——これは〈きちんと考えて解く〉ための練習です。①と②とをくりかえすうちに、二つの力が結びつき、〈速く、きちんと考えて解く〉ことができるようになります。

③ 最後に、〈解答・解説編〉を見て、〈解答・採点基準・解説〉を参考に、自分の答案を採点・添削してみよう。

——これは、自分の答案の欠点を自分で見つけ、修正する練習です。この練習をくりかえし、〈自分の答案を添削する力〉をつけてゆくことが、つまりは記述表現力を高めることなのです。よりよい答案を書く力とは、試験時間中に自分の答案を添削できる力なのですから。

④ 知識を問う設問で誤ったものについては、その日のうちに復習し、覚えておくようにしましょう。読解を求める設問については、しばらく日をおいて〈解答・解説〉の内容を忘れたころに）もう一度同じ手順でやり直してみるのも効果的です。

# 古文編目次

	〔出典〕	〔〕は解説冊子の頁	〔出題大学〕
第1回	昔、あてなる男ありけり。	『伊勢物語』……………4	〔3〕 岐阜大学
第2回	このおとどの子どもあまたおはせしに、 左衛門の内侍といふ人はべり。	『大鏡』……………6	〔7〕 滋賀大学
第3回	中比、なまめきたる女房ありけり。 <small>なかごろ</small>	『紫式部日記』……………8	〔11〕 静岡大学
第4回	昔より道を執するは興ある事なり。	『古今著聞集』……………10	〔14〕 信州大学
第5回	歌など、またさらぬことも、物書くに	『袋草紙』……………12	〔17〕 鹿児島大学
第6回	月見る月十九日といふ日は、	『玉勝間』……………14	〔20〕 金沢大学
第7回	九日。今日は雨やみぬれど、空曇りて	『永代橋の墜落』……………16	〔23〕 岡山大学
第8回	昔おはしましける帝の、ただ若き人をのみ	『打出の浜の日記』……………18	〔26〕 奈良女子大学
第9回	昔、晴明が土御門の家に老い白 <small>しろ</small> みたる老僧	『枕草子』……………22	〔30〕 熊本県立大学
第10回	ある聖、都ほとりをいとふころ深くて、 <small>ひじり</small>	『宇治拾遺物語』……………26	〔34〕 小樽商科大学
第11回	十一月もおなじごとにて、 <small>しもつき</small>	『発心集』……………30	〔38〕 神戸大学
第12回	北山の辺によしある所のありしを、	『蜻蛉日記』……………34	〔43〕 首都大学東京
第13回	例の方におはして、髪は尼君のみ梳りたまふを、	『建礼門院右京大夫集』……………38	〔47〕 三重大学
第14回	さても、かくて見捨てんはいとほしう、	『源氏物語』……………40	〔50〕 広島大学
第15回		『狭衣物語』……………44	〔55〕 宇都宮大学

## 第1回

## 『伊勢物語』

★☆☆

岐阜大  
解説 3ページ

25分

30点

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、あて<sup>イ</sup>なる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記<sup>ないき</sup>にありける藤原敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさ<sup>ロ</sup>をさしからず、言葉もいひ知らず、いはむや歌は詠まざりければ、かのあるじなる人、案を書きて、書かせてやりけり。め<sup>ハ</sup>でまどひにけり。さて、男の詠める。

つれづれのながめにまさる涙川袖のみひちて逢ふよしもなし

返し、例の、男、女に代はりて、

浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ

といへりければ、男い<sup>③</sup>といたうめでて、今まで巻きて文箱<sup>ふばこ</sup>に入れてありとなむいふなる。

男、文おこせたり。得て後のことなりけり。雨<sup>三</sup>の降りぬべきになむ見わづらひ侍る。身幸ひあらば、

この雨は降らじ<sup>⑤</sup>』といへりければ、例の、男、女に代はりて詠みてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

と詠みてやりければ、蓑も笠も取りあへで、しとどに濡れて惑ひ来にけり。

（『伊勢物語』より）

（注）内記——中務省の官職。詔勅・宣命などを起草し、叙位の辞令を書くなど、宮中の記録に従事した。多く文章や書に巧みな人が任じられた。

藤原敏行——歌人で、『敏行朝臣集』がある。三十六歌仙の一人。書家としても知られる。  
ひちて——「ひち」は「漬つ」で、水につかる、濡れる、の意。後世、「ひづ」と濁音化する。

問1 傍線部イハの語の意味を記しなさい。

問2 傍線部①⑤の「男」のうち、藤原敏行を指すものを、次の組合せの中から一つ選び記号で答えなさい。

- a ①③④      b ①③⑤      c ②③⑤      d ②④      e ②⑤

問3 二重傍線部「なる」の文法的意味と活用形を、例に従って記しなさい。

(例) 歌は詠まざりければ↓打消・連用形

問4 傍線部一の「案を書きて、書かせてやりけり」とは、どのようにしたことなのか、簡潔に記しなさい。

問5 傍線部二を、真意がわかるように現代語訳しなさい。

問6 傍線部三について、次の問いに答えなさい。

1 「見わづらひ侍る」とは、どのような様子をいうのか、わかりやすく説明しなさい。

2 傍線部の表現から推測される、女に対する敏行の気持ち(の変化)を、わかりやすく説明しなさい。

問7 傍線部四について、敏行がそのような行動をとったのはどうしてか。次の中からもつとも適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- a びしょ濡れの状態で訪ねていけば、女の同情を引くことができるだろうと考えたから。  
b あまりによく出来た歌なので、本当に女が詠んだ歌なのかどうか確かめてみたくなつたから。  
c 愛の移ろいを気付かれないようにすることこそが、女へのせめてものいたわりだと思ったから。  
d 自分は恋の涙で、降る雨にもまして身を濡らしているのだということを、女に気付かせようと思ったから。  
e 自分(敏行)の気持ちを試そうという巧妙な詠歌に、改めて感じ入ったから。

古文編 1

『伊勢物語』

得点

点

問 1

イ

ロ

ハ

問 2

問 3

(意味)

(活用形)

問 4

問 5

問  
7

--

問 6	2	1

Sample

## 古文編1 『伊勢物語』

## 解 答

問1 イ 高貴だ ロ 書き慣れている

ハ ひどく感心する

問2 a

問3 伝聞・連体形

問4 女の主人にあたる男が、敏行に贈る女のと歌の下書きを

書いてやり、それを女に清書させて贈らせたということ。

問5 あなたの私に対する愛情が浅くて涙も多くは出てこない

ので、涙川の水かさも浅く、あなたの着物の袖が濡れるという程度なのでしょう。

問6

1 雨が降るのか降らないのか判断しかねていて、そのため、敏行としては、女のもとに逢いに行くかどうか迷っているという様子。

2 女に言い寄るときはとても熱意があつたのだが、いつ

たん恋人関係になってしまふと、さほど熱烈な愛情をそそぐというほどではなくなった。

問7 e

## 配点・採点基準

30点

問1 〈各2点〉

イ◇「上品だ」「身分が高い」など、可。

ロ◇「熟達している」など、可。

ハ◇「ひどく」など、強調する表現が加わっていない場合は、マイナス1点。

問2 〈3点〉

◇正答のみ可。

問3 〈3点〉

◇正答のみ可。

問4 〈4点〉

\*「女の主人にあたる男が」「女のと歌の下書きを書いてやった」ということが出ていて、まず3点。この部分ができていないと、他に関わらず、全体として0点。

\*「女に清書させて、贈らせた」という点が説明されて、1点加点。

問5 〈4点〉

◇「愛情が浅い」「涙の量が少ない」「涙川が浅い」「着物の袖が濡れる」という点がすべて説明されていて、4点。これに不備があれば、一ヶ所2点ずつを目安に減点。

問6 〈各3点〉

1◇「雨が降るのかどうか」「女のもとに行くかどうか」という二つの要素が関連づけられていて、3点。その本筋をとらえていない答案は、0点。

2◇「はじめは情熱的」という点に加え、「現在は熱意が薄れている」という説明ができていて、3点。この対照的な様子が説明されていないと、0点。

問7 〈4点〉

◇正答のみ可。

出典

『伊勢物語』。

『伊勢物語』は、十世紀前半、平安時代前期に成立した、歌物語。作者はわかっていない。主人公の「男」は、彼が詠んだ和歌などから、在原業平を思わせる。なお歌物語としては、『伊勢物語』のほか、『大和物語』、『平中物語』の三作品があり、どれも平安時代前期の成立で、作者は未詳である。

解説

問1 〈語句の意味〉

基本的な語彙についての設問である。

イ「あてなり」は、高貴だ、身分が高いという意味。「あてやかなり」などもほぼ同義語として用いる。

ロ「をさをさし」は、大人びているという、もともとの意味から転じて、何かのことに長じている、熟達しているということ。ここでは、打消の「ず」がついた「をさをさしからず」で、「女」がまだ恋愛経験などがなくて、恋文を書くこと、さらには恋の和歌の贈答に慣れていないということを行っている。

なお、傍線は「をさをさしから」に付されていて、「ず」までは含まれていないので、解答は「書き慣れている」などと、肯定文のかたちで対応することになる。

ハ動詞「めづ」は、大切にする、褒める、賞賛するなどの意味。動詞「まどふ」は、気持ちが揺れ動いているさまを言うが、「くまどふ」のように補助動詞の位置に来たときには「ひどくくする」となる。よって、「めでまどふ」で、「ひどく感心する」となる。

問2 〈人物関係〉

この話に登場する人物は、決して多数ではないが、敏行以外は固有名詞を持っていないし、「男」とのみなめるのが誰を指しているのか、とても曖昧に感じるかもしれない。しかし、読者がそれを判別できると作者は思っているのだ、単に「男」と言うのみなのだ。何かしら根拠を考えながら、一つ一つの人物関係を整理してゆくほかあるまい。

- ① 「女」から和歌を返してもらった人物だから、敏行。
  - ② 「女」に代わって歌を詠むのだから、「女の主人」。
  - ③ 「浅みこそ……」の和歌をもらって喜んでるのは、敏行。
  - ④ 「女」を「得た」人物だから、敏行。
  - ⑤ 「女」に代わって歌を詠むのだから、「女の主人」。
- 以上から、敏行を指すのは、①③④となる。

問3 〈助動詞の判別〉

まず、断定の助動詞「なり」なのか、伝聞・推定の助動詞「なり」なのかの判別が求められていることが分かるだろう。前者、即ち断定の助動詞「なり」の場合は、「なり」の直前の語は名詞や連体形。また、後者、即ち伝聞・推定の助動詞「なり」の場合、「なり」の直前の語は、それがラ変型に活用する語ならば、連体形、それ以外の活用する語ならば、終止形となる。

しかし、二重傍線部の直前は、動詞「いふ」が来ているのだが、「いふ」はハ行四段活用なので、終止形も連体形も「いふ」となって、区別がつかないのだ。

となると、文脈で判断することになる。敏行は恋する女から届いた和歌を、文箱に入れて大切にしていたという話である。それも紙を折らずに保存していたというのである。そうした細かな話は、登場人物の関係者でもない作者が自分の目で見ていた訳ではなく、伝え聞いたと考えるのが妥当なところだろう。よって、助動詞としてのここでの



意味は、伝聞ということになる。

なお、活用形は直前の「なむ」を承けて係り結びとなり、連体形である。

#### 問4 〈文脈の説明〉

傍線部の直前に、「いはむや歌は詠まざりければ」とあって、「女」はまだ経験が浅くて、和歌を詠むだけの能力を備えていないという説明がある。しかしこれから、恋人との和歌の贈答が展開してゆくことが考えられるのである。そういう状況で「案」を書いてやったとなると、それは「女の主人」が和歌の下書きをしてやっていたということになる。ここから考えを整理してゆけば、「書かせて」の部分は、「女の主人」が「女」に清書させたこと、「やりけり」は、歌を敏行に贈ったこととなる。

#### 問5 〈現代語訳〉

後半の「袖はひつらめ」は、その前の「つれづれの……」の歌に「袖のみひちて」とあり、この「ひちて」には注が付いて「水につかる、濡れる」の意とあるのを利用できる。とすると、「浅みこそ」の解釈が肝要となる。「こそ」は強意の係助詞だから、「浅み」の意味がさらに重要となってくる。

「浅み」は、形容詞「浅し」の語幹「浅」に接尾辞「み」が付いて、「浅いので」「浅いから」という意味である。

設問はさらに「真意がわかるように」という要求を提示している。ここは、涙川の水かさが浅いからということになるのだが、この「真意」として考えられるのは、「愛情が浅いから」ということになる。

#### 問6 〈文脈の説明〉

1 「ゝわづらふ」とは、ゝすることがうまくできないでいるということ。

また「見る」という動詞には、「判断する、予想する」などという意味がある。よって、「見わづらふ」とは、判断しかねているということになる。

そして、傍線部には「雨の降りぬべきに」とある。つまり、敏行は雨が降ってしまいうるので、女のもとに行こうかどうか、判断しかねているというのである。

2 敏行ははじめ、「つれづれの……」の歌に見られるように、「女」に対して情熱的であった。ところが、1では、敏行が「女」のもとへ行こうかどうか、迷っているということであった。どうしても逢いたいという感じではない。ということは、女に対する愛情が、以前ほど情熱的ではないということになる。

#### 問7 〈登場人物の心理〉

a 女の同情を引くという発想は、本文の中からうかがえない。

b 敏行は女の歌が「代詠」ということに全く気づいていないので、確かめようとは思わない。

c 「愛の移ろいを気付かれないようにすること」が「せめてものいたわり」だと説明する限り、敏行の愛情が薄れてしまったこと自体は変わらないことになる。しかし敏行が女のもとへ急いで行ったのは、女の歌を見て、心を動かされたことと見るべきであろう。即ち「せめてものいたわり」ではない。

d 「恋の涙」で「身を濡らしている」ということは、そもそもどこにも書かれていない。

e 「改めて」感じ入ったということは、かつて愛情を強く感じていた状態に戻ったということになり、雨に濡れてまで逢いに行ったという次の行動につながるということとなる。

## 現代語訳

昔、高貴な男がいた。その男のもとにいた人のことを、内記であった藤原敏行という人が言い寄っていた。そうではあるけれど、女は年齢が若いので、恋文のやりとりなどは書き慣れてはおらず、恋の言葉もどう言っているかわからなくて、ましてや和歌は詠まなかったもので、その家の主人である人が和歌の下書きを書いて、女に書かせて、贈っていた。(敏行は) 贈られた歌にひどく感心した。そうして、男へ「敏行」が詠んだ歌。

つれづれの…あなたに逢えなくて呆然としていますので、毎日降り続く雨が以前にもまして多く降るのと同様に、涙がおのずと以前にもまして多く流れて、そのためにできた涙川で、袖が濡れるばかりで、あなたに逢いに行くことができる方法はありません。

女からの返歌は、いつものように、男へ「女の主人」が、女に代わって詠んで、

浅みこそ…あなたの私に対する愛情が浅くて涙も多くは出てこないもので、そのため涙川の水かさが浅いので、あなたの着物の袖が濡れるという程度なのでしょう。涙川にご自身のお身までも流れるほど涙がおのずとたくさん出てくると聞いたならば、わたしはあなたの愛情を信じてあなたを頼ることにしましょう。

と、言ったので、男へ「敏行」はこの歌にひどく感心して、今まで、手紙の紙をくりりと巻いて、文箱に入れてあるというそうだ。

男へ「敏行」が手紙を送ってきた。男へ「敏行」が女を自分のものにした後のことである。「雨が降ってきてしまいそうなので、それを見て私は、あなたのところに行くかどうか、躊躇しております。私に運があるのならば、この雨は降らないでしょう」と言ったので、いつものよう

に、男へ「女の主人」が、女に代わって詠んで贈らせる。

かずかずに…あなたが私のことをいとおしく思ってくれているのか、思ってくれてはいいのか、尋ねがたいので、我が身のつらさを知ってくれている雨は、わたしの涙と同様に、以前にもまして、よりいっそう、たくさん降ってきています。

と詠んで贈ったので、(敏行は) 簀も笠もしっかり手に取ることもしないほどに慌てて、ひどく雨に濡れながら、気持ちを動揺させつつ(女のもとに) やって来た。

# 漢文編目次

第1回	鶏能司晨、見於経伝、	『明道雜志』……………4	〔59〕	お茶の水女子大学
第2回	荀巨伯遠看友人疾、	『世説新語』……………6	〔62〕	新潟大学
第3回	朱買臣字翁子、	『漢書』……………8	〔65〕	奈良女子大学
第4回	馬正惠嘗得鬪水牛一軸。	『図画見聞志』……………10	〔69〕	山口大学
第5回	新製布裘 白居易	『白居易集箋校』……………12	〔73〕	佐賀大学
第6回	宋人有酤酒者。	『韓非子』……………14	〔77〕	宮城教育大学
第7回	吾昔少年時、所居書室前、	『記先夫人不殘鳥雀』……………16	〔80〕	滋賀大学

〈出典〉

〔 〕は解説冊子の頁

〈出題大学〉

# 第1回

## 『明道雑誌』張耒

☆☆☆

お茶の水女子大  
解説  
59ページ

20分

30点

次の文章は、筆者の鶏に関する見聞を記した随筆である。これを読んで後の問いに答えよ。設問の都合上、送り仮名を省いた箇所がある。

鶏能<sup>(a)</sup>司<sup>ル</sup>晨<sup>ヲ</sup>見<sup>ユ</sup>於<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>伝<sup>ニ</sup>以<sup>ヘ</sup>為<sup>リ</sup>至<sup>リ</sup>信<sup>ヲ</sup>而<sup>ル</sup>未<sup>ニ</sup>必然<sup>一</sup>也。某<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>河<sup>ニ</sup>南<sup>ニ</sup>寿<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>尉<sup>ニ</sup>因<sup>リ</sup>驗<sup>ニ</sup>尸<sup>ニ</sup>往<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>旁<sup>ニ</sup>県<sup>ニ</sup>夜<sup>ニ</sup>宿<sup>ル</sup>一<sup>ニ</sup>村<sup>ニ</sup>寺<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>明<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>程<sup>ニ</sup>尚<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>余<sup>キ</sup>謂<sup>ヒ</sup>從<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>「鶏<sup>ノ</sup>鳴<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>」從<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>「今<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>寒<sup>ク</sup>鶏<sup>ノ</sup>懶<sup>ナリ</sup>俟<sup>マタ</sup>二<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>鳴<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>矣<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>若<sup>ニ</sup>見<sup>レ</sup>星<sup>ヲ</sup>而<sup>ク</sup>行<sup>一</sup>也」余<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>信<sup>セ</sup>明<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>將<sup>ル</sup>旦<sup>ナラント</sup>而<sup>レ</sup>行<sup>ケバ</sup>鶏<sup>ノ</sup>竟<sup>ニ</sup>未<sup>ダ</sup>鳴<sup>カ</sup>在<sup>リシ</sup>二<sup>ニ</sup>黄<sup>ニ</sup>州<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>或<sup>ル</sup>夜<sup>ニ</sup>月<sup>ヅル</sup>出<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>鄰<sup>ニ</sup>悉<sup>ク</sup>鳴<sup>ク</sup>大<sup>ニ</sup>抵<sup>ル</sup>有<sup>レ</sup>情<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>物<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>不<sup>シテ</sup>能<sup>ハ</sup>有<sup>ル</sup>常<sup>ニ</sup>而<sup>イハ</sup>或<sup>ズル</sup>變<sup>スル</sup>也。

(張耒『明道雑誌』による)

(注) ○晨——夜明け。

○寿安——地名。

○驗尸——検屍すること。

○上道——出発すること。

○黄州——地名。

○經伝——經書及び經書を説明解説した書。

○尉——官名。軍事、警察、刑罰を担当する。

○旁県——近隣の県のこと。

○懶——怠惰であること。

○旦——夜明け。

○某——わたくし。

○程——旅程。みちのり。

○程——旅程。みちのり。

○程——旅程。みちのり。

○程——旅程。みちのり。

問 1 (a)「司」、(b)「尚」、(c)「悉」の読みを記せ。現代仮名遣いでよい。

問 2 傍線(1)「未必然也」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名遣いでよい。

問 3 傍線(2)「不若見星而行也」を現代語訳せよ。

問 4 従者の言葉について、傍線(3)「余未之信」と述べているのはなぜか。説明せよ。

問 5 鶏に関する見聞を通して、筆者はどのような感慨をもったのか。説明せよ。

漢文編 1

『明道雜誌』

張耒

得点

点

問 1

(a)

(b)

(c)

問 2

問 3

問 4

問 5

## 漢文編1 『明道雜志』 張耒

## 解答

問1 (a) つかさど (るは) (b) なお

(c) ことごと (く)

問2 いまだかならずしもしからざるなり

問3 星(の動き)を見て出発するほうがよいのです。

問4 鶏が夜明けを告げることは経書やその解説書にも記されており、筆者自身も間違いないことだと信じていたから。

問5 心を持つものは人も動物もすべて、とかくその心を一定に保つことは出来ないものであり、時と場合によって変化してしまうものだという感慨。

## 配点・採点基準

30点

問1 〈各2点〉

◇(a)・(b)・(c)ともに正しい読み方が出来ていれば、2点。それ以外は、0点。

問2 〈6点〉

◇6点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。一つ間違いがあれば、4点。二つ間違いがあれば2点。三つ間違いがあれば、0点。

\*「未」を、再読文字として「いまだ」ず」と正しく読めていること。

\*「必」を、「かならずしも」と部分否定の場合の読み方が出来ていること。

\*その他の部分に読み間違いがないこと。

問3 〈6点〉

◇6点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス3点。一つ間違いがあれば、3点。二つ間違いがあれば0点。

\*「不若」が比較の表現であることを理解して、「しつたほうがよい」のように訳していること。

\*その他の部分(「見星而行也」)に誤解がないこと。

問4 〈6点〉

◇6点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス3点。一つ間違いがあれば、3点。二つ間違いがあれば0点。

\*傍線部の「余未之信」の内容(とくに一人称代名詞の「余」や指示語「之」の指示内容など)を正しく理解した上で、その理由を説明しようとしていること。

\*傍線部の理由が、冒頭の一文「鶏能く至信」に示されていることを理解して、その部分を正しくまとめて解答していること。

問5 〈6点〉

◇6点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス3点。一つ間違いがあれば、3点。二つ間違いがあれば0点。

\*最後の一文「大抵く変也」が筆者の感慨であることを理解してまとめていること。

\*右記部分の内容を、正しく理解した上で解答していること。

## 出典

宋の張耒の『明道雜志』。『明道雜志』は、当時の旧聞・逸事を雑録した随筆集である。

## 解説

鶏が鳴き声で夜明けを知らせることは経書やその解説書に記されており、筆者もそれを信じていた。ところがそれがあてにならないものであることを、筆者自身の経験談で説明し、人が時と場合に左右されてその節操を曲げてしまうのも、心を持つ動物すべての本来的な性質としてしかたがないことなのかと結んでいる随筆である。

出題者によるリード文に文章のテーマが示されている。鶏鳴が夜明けを告げるという話題は、卑近なものであるから比較的読みやすい文章であろう。ただし、筆者の感慨が示されている最後の一文の内容は、なかなか難解である。

## 問1 〈語の読み〉

- (a) 「司(つかさどル)」は、漢文というより現代語の常識。  
 (b) 「尚(なホ)」は類出副詞で、「まだ、やはり」と訳す。  
 (c) 「悉(ことごとク)」も漢文で時折出会う副詞で、「尽」と同じ働きをもつものである。多くの入試漢文で、漢字一字の読みが問われる。とくに副詞がよく出題されている。日頃の漢文学習で、副詞の読み方には注意していこう。

## 問2 〈書き下し〉

「未」は再読文字「いまダゝず」。副詞の「必」を「かならず」と読めない人はいない。ところがここでは、「未必」が〈否定詞＋副詞〉という部分否定の語順になっている。「不必」と同様に、「必」を「必ずしも」と強調して読む必要がある。「未必」は、「いまダかならずシモゝず」と読んで、「(まだ)ゝとはかぎらない」と訳す表現である。あとは、動詞「然(しかリ)」を未然形「(しかラ)」にして「未」の再読部分の「ず」に接続させ、「ず」を連体形「(ざる)」にして「也(断

定なり)」に接続させればよい。「いまだかならずしもしからざるなり」が正解。

## 問3 〈現代語訳〉

「不若」は、「不如」と同じく「ゝニシカズ」と読んで「ゝに及ばない、ゝのほうがよい」と訳す比較の表現である。これがわかっているならば、傍線部は「星を見て行くほうがよい」と直訳できる。さらに文脈から「鶏をあてにするよりも」星の動きを見て出発するほうがよいでしょう」のように訳せば正解。

## 問4 〈理由説明〉

理由を説明するためには、まず傍線部「余未之信」自体の意味を正しく把握しなくてはならない。「余」が筆者が使っている一人称代名詞であり、指示代名詞「之」が「鶏はあてにならない」という趣旨の従者の言葉を受けていることがわかれば、傍線部の意味は「私はまだ従者の言葉を信じていなかった」となる。

さてその理由を答えるためには、文章冒頭に「ゝ以為至信」という部分があったことに着眼したい。これは明らかに傍線部に対応する表現になっている。つまり、「鶏が夜明けを告げることは経書やその解説書に書かれており、間違いないことだと信じ込んでいた」からこそ、従者の言葉は信じられなかったのである。

## 問5 〈文章全体の趣旨にかかわる筆者の感慨の説明〉

文章全体を意識しつつ、最後の一文「大抵有情之物、自不能有常而或変也」を中心に説明すればよい。

「大抵」は現代語でも使われている語。「情」は「感情、心」。漢文の「物」は、「動物」や「人間」の意味になることもある。ここでは、寒い季節の鶏が寝坊するという従者の言葉が、人間にも当てはまると



筆者は考えたので、両方の意味を兼ねて使われている。「自」は「みづから」と読めば「自分で、自分で自分を」、「おのづから」と読めば「自然に、ひとりでに、本来」と訳す。ここは「本来」と訳したいところである。漢文の「或」は現代語と異なり、「ある場合に」と訳すのが基本である。

以上をまとめれば「一般に心を持つものは人も動物もすべて、本来心（節操、信念）を一定に保っておくことは出来ず、時としてこれを変化させてしまうものだ」というのが最後の一文の内容となる。本能や習性で一定の行動をとると思われがちの動物でも、人と同じように時と場合で行動を変えてしまうものだという共通点に気づいて、筆者はこの文章を書いたのである。

## 読み方

鶏ニハトリ能シツく晨ツカギを司シるは、経ケイ伝デンに見ミえ、以オ為モへく至キりて信シンなりと。而シカに未イマだ必カナラずしも然シカらざるなり。某ソレガシ河南カナン寿安ジュアンの尉イニに任ニぜられ、驗ケン尸シに因ヨりて旁ボウ県ケンに往ユくに、夜ヨル一イツ村ツン寺ジの中に宿ヤドる。明日アイトの程ヨウ尚ナ遠トハきを以モて、余ヨ従ジュン者シャに謂イひて曰イハく、「鶏ニハトリ鳴ナくの時トキに上ジョウ道ダウせん」と。従ジュン者シャ曰イハく、「今天イマ寒サムイく鶏ニハトリ懶マンなり。其ソノ鳴ナくを俟マたば向ムカに明アカけん。星ホシを見て行ユくに若シかざるなり」と。余ヨ未イマだ之コレを信シンぜず。明日アイト將マカに旦ニチマデならんとするに行ユけば、鶏ニハトリ竟イマに未イマだ鳴ナかず。黃州コウシュウに在アりし時トキ、或ある夜ヨ月ツキ出デづるに、四鄰シリン悉セツく鳴ナく。大抵タイヂ情ジョウ有アるの物モノ、自オノら常ツネ有アる能あたはずして或あるいは変ヘンするなり。

## 現代語訳

鶏が夜明けを告げることができるのは、経書やその解説書にも書かれており、（わたしも）間違いないことだと信じ込んでいた。ところが、そうだとはいえないようである。わたしが河南寿安の尉を任されていた

ときのこと、検屍のために近隣の県に出掛けた折、夜ある村の寺に宿をとった。翌日の旅程がまだ長かったので、私は従者に言った、「鶏鳴の時刻には出発しよう」と。（ところが）従者が言うには、「今は寒のさなかで鶏も怠慢になっています。鶏が鳴くのを待っているのは、先に夜が明けてしまうでしょう。（それよりも）星の動きを確認して出発するほうがよいです」と。私は（この時）従者の言うことが信じられないでいた。（ところが）翌朝夜が明けようとする時に出発したのだが、鶏はとうとう鳴かなかったのである。（また）黃州にいた時、ある夜月が出た時に、四方の鶏が一斉に鳴きだしたことがあった。とかく心を持つものは動物も人間も、本来心を一定に保っておくことが出来なくて、時と場合によって変化させてしまうものようである。